赤いワンピース

朔良梨里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤いワンピース

【Ｎコード】
Ｎ２７８０Ｅ

【作者名】
朔良梨里

【あらすじ】
一人の少女が自殺した。幼馴染の理穂だった。赤いワンピースが良く似合う女の子だった……
それから数日後、理穂をいじめていた奴等が殺された。
理穂は復讐をするために戻ってきたのだ。
赤いワンピースを風になびかせて……

※只今リライト中です。（２０１０．６．９）

プロローグ（前書き）

プロローグ

0　―プロローグ―

――ねえ、知ってる？

――何？

――赤いワンピースを着た女の子の噂だよ。

――なにそれ？知らないよ。どんな話？

――あのね、いじめっ子のところに赤いワンピースを着た少女が現れて、手に持っている大きな鎌で首を切って、頭を持っていっちゃうんだって。

――何それ。こわーい。

――何でも、その子はいじめられて自殺しちゃったらしいの。

――なるほど……その恨みなんだぁ。

――そ。だからいじめとか、しちゃだめだよ。

――でも、それって噂でしょ？

――だけど、前に高校生が連続で首切られて殺されてたでしょ。

それがそうなんだよ。それに最近首切り事件多いし……

――でも、偶然かもよ。たまたま殺害方法が首切りってのが多かっただけだったり。

――……信じないの？

――もっちろーん！当たり前でしょ。

――何でよ。

――ばっかじゃないの？幽霊とかいるわけないじゃん。今の世の中だよ？それになにより……いじめるの楽しいんだもん。いちいち殺されてたまるかっつーの。

――そんなんだから……なのよ。

――はい？何ていったの？

――……あなたの後ろには誰がいる？

――……え……？

「……昨日午後６時ごろ、―県―市―町の―川の河川敷で、川崎理穂さん（１６）高校１年生が、焼死体で発見されました。
警察によると、近くに理穂さんのものとされる鞄があったため、身元が判明したそうです。
なお、遺書が発見されたため、自殺として捜査をするそうです。
引き続き、同県同市で発生した女子高生行方不明事件について、お伝えします。……」

1―ハジマリ―　1

1　―ハジマリ―

一人の少女が自殺した。

幼馴染の理穂だった。

赤いワンピースが、とても良く似合う女の子だった。

そしてなにより、俺は……彼女のことが好きだった。

世界中の誰よりも。

理穂はいじめられていた。

そのことは、みんな……クラスメイトも、先生も知っていた。

いじめはクラスの中で行われていたのだから。

だけど、止める者はいなかった。

俺はそんな彼女を守れなかった。
守りたかった……。
幸せにできなかったんだ……。
好きだとも伝えられずに……。

「ねえ、次は誰をいじめる？」
「えーっ、誰がいいかな」
「あいつ死んじゃったもんねー」
「アイツまさか自殺しちゃうとは思わなかったし。迷惑だっつーの」
「そうそう。アタシらがいじめていたって気づかれてもいやだし。いじめにくくなっちゃったじゃん」
「でもやめられないんだよねぇ」
「あのときのあいつの顔を思い出すだけで……っぷ」
「一回始めるとやめられない～♪」
「あっそーだ、あいつにしようよ」

「そーだね、あのブスがちょーどいいや」
「じゃあ、今日から始めよーぜ」
「おっけー」
「えっとぉ、こんなのは？」
「あっ、いいねぇ」
「早速しよーよ」

人が一人死んだだけじゃ、いじめはなくならない。
自分が同じ目にあわなければ分からないのだ。
痛み。苦しみ。憎悪。
だから彼女は復讐をすることにしたのだろう。
優しい子だったから。
自分と同じ目にあっている人を助けるためにも。
そしてなにより、自分をいじめた奴に、同じ苦しみを与えたかったのだろう。
たとえそれが自分自身を闇に堕とす事だとしても。

たとえ、自分を殺すことになったとしても。

――さあ、復讐の幕を開けよう

2

理穂は普通の女の子だった。

あまり目立ってはいなかったけれど。

不細工なわけではなかった。

逆に、かわいかった。

そして、頭も良かった。

大人しくて……優しかった。

男子にも人気があった。

だから、嫉妬をする女子が多かった。

全てはあの時から始まっていた――――

今日は理穂の誕生日だ。
理穂は、俺の大切な幼馴染。
理穂とは家が近所ということで、小さい頃からよく遊んでいた。
彼女のことを思わなかった日は無い。
大人しくて、笑顔が可愛い女の子。
おっちょこちょいで、それでも一生懸命に頑張る女の子。
そんな理穂のことが、ずっと好きだった。
この思いを伝えようとして成功したことは、未だに無いのだけど。
ちなみに、高校生になった今でも、親しくしている。

もちろん、友達という意味で。

3

キーンコーンカーンコーン――

「んー。やっと終わったな」

放課後になった。
教室中がざわめく。
聞こえる声、声、声。
腕を伸ばす。
席を立つ。
これからやらなくちゃいけない事があるから。
それを考えるだけで、自然と頬が緩んでしまう。
「ふんふふ～ん♪」
鼻歌を歌いながら、理穂の席に行った。
理穂は相変わらずぼやーっとしている。
理穂の席は窓際だ。
どうやら、窓の外を見ているようだ。
相変わらず……可愛いぞ。
ずっと見ていたいが……時間がなくなってしまう。
仕方がない。
「お～い？」
理穂の耳元で呼びかけてみる。
理穂は一瞬びくっとして、

「……えっ！？何でしょう……って優人？どうしたの？」
くりっとした瞳を俺に向けてくる。
…やばい。
何かこみ上げてきたものを抑えながら、
「なぁ、このあと買い物にでも行かないか？最近遊んでないだろ？」
「え？　そ、そんな。悪いよぉ」
手をびゅんびゅん振って、遠慮する。
理穂の悪い癖。
なんでもすぐに遠慮してしまう。
「俺にとっては全然悪くないぜ。まさか……俺と一緒じゃ嫌とか！？」
「そんなことないよっ」
理穂は顔を赤くして言った。
「悪い、冗談だ。……それにさ、今日お前の誕生日だろ？」
「あ、そういえばそうだねぇ」
理穂は笑って言った。
「まさかお前、覚えてなかったりとか！？今朝祝ったのに！？」
「そういう訳じゃないよ～。朝はありがとでした。でも……そこまでこだわらないですから」
「いや、こだわれよ！」
自分の生まれた日なんだぞ。
「それじゃあ、これからは気にしとくね」
「……まぁいいや。そういうわけで今日は一緒に買い物だ。遠慮したらだめだぞ」
理穂にはこれくらい言う方がちょうどいい。
もっと自分を出さないと。
「むぅ……それでは遠慮なく」
理穂は困ったように、でも嬉しそうに言った。
「そう、それでいいぞ」
俺が勝ち誇ったように言うと、

「うん。……いつもありがとね」
理穂は俺を見つめて言った。
ドキッとした。
「な、なんだよ急に」
理穂の瞳が、少し寂しそうに見えたから。
「いや、なんか言いたくなって」
「……別に俺がしたくてしてることだからな」
嘘は言ってない。
俺はお前が好きで、一緒に居たくてしてるだけだし。
……お前に幸せになってほしいし。
出来ているのかはわからないけど。
「それでもうれしいよ」
理穂はさっきとは違って、笑顔で言った。
でも、その一言でよかったって思える。
笑顔になった理穂を見ると、よかったって思える。
「そっか……。そう言ってもらえると俺も嬉しいよ」
「あははっ」
そんな理穂を見ていると……自分でも顔が赤くなっていくのが分かる。
それを隠すためにそっぽを向く。
「……じゃあいくぞ」
「あっ。ちょっと待ってよ。優人ったら」

4

「もう……。そんなに急がなくてもいいでしょ。咲をほっとらかしにして行けないのに」
「悪い悪い。今度からは気をつけます」
「うむ、分かればよろしい。……あとね、なんか咲、別れ際にがんばれーって言ってたんだけど……何のことなのかな？」
あいつめ。
「それは……まぁ、そのだな。気にすんなって」
「え～？気になるよぉ」
その後、俺達は学校を後にして商店街に向かった。
学校から近くて、いろいろな店が集まっていて便利だからだ。
ちなみに咲とは、理穂の友達だ。
クラスの中で数少ない。
……俺、先走りすぎるとこがあるからなぁ。
ちゃんと周りを見ないと。
「ねぇ、優人」
今、理穂は俺の隣を歩いている。
……傍から見ると、俺達は恋人同士とかに見えるんだろうか。
「今度は何だよ、理穂」
ふと浮かんだ考えを押しやって言った。
「ところで買い物って……何買うの？」
「え！？分かってなかったのか！？」
「うん」

こいつは最強に鈍感なようだ。
……知ってるけどな。
何度告白して流されたことか……。
ま、そこも可愛いとこなんだけど。
「あーのーなっ！今日はお前の誕生日で……だから、うん。……これ以上は言わずとも分かるだろっ」
……恥ずい。
さすがに理穂も気づいたらしく、顔を真っ赤にしてうつむいて、
「そっか……ありがと」
と、ただそれだけを言った。
照れてる。
可愛い。
それからしばらくすると、だいぶ気持ちが落ち着いてきたようで、
「……あのねっ、今日咲がねっ」
「お、おう」
「これくれたんだよ」
「お！それすげー理穂に似合ってるよ。さすがだな、あいつ」
「すっごくうれしかったの」
「そうか！……俺も負けてらんねーな」
「？……咲と勝負してるの？」
「いやいやいや」
と、そんな感じで話しながら歩いると、やがて商店街に着いた。
「おーっ、やっぱりここはいつも賑やかだな」
「街の中心だもんね」
「俺達の学校ってさ、何気に便利な所にあるよな」
「そだねー」
歩きながらいろいろな店のウィンドウを見る。
「あ、かわいい」
「どれどれ……うぉ、高けぇ！！」
「お！変なの発見」

「どれどれ……うぉ、何だあれ！！」
「優人！あれ！」
「どれどれ……うぉ、すげぇ！！……っていつまで続くんだよ！」
「えへへ。ついおもしろくなっちゃって」
「まー、俺も乗っちゃったしな」
「じゃあ次いこー♪」
「お前地味に買い物好きだろ！」
と、こんな感じでしばらく歩くと、理穂の好きそうな、可愛い服がいっぱいありそうな店が目にはいった。
「おーい理穂さーん？」
「何でしょうか優人さーん？」
……つくづく乗りのいいやつめ。
「その店、どうだ？」
指を指すと、どうやら当たりの様で、理穂は目を輝かせた。
「ここ……なんか好きかも」
どうだ俺、凄いだろ。
伊達に理穂の好みを知ってるわけじゃあないんだぜ。
「それじゃあ、ここに入ってみるか？」
「でも、どうしよ……とってもおしゃれなんだけど……私普段そこまでこういうお店には行かないから」
なんか意外だった。
「お、そうなのか？普通に行ってそうだけど」
「たまになら行くけど、普段はあんまり……だって……こういうとこ、高いんだもん」
理穂は悲しそうに言った。
確かに。
「でもさ、好きだろ。こういう雰囲気の店」
落ち着いた感じで、でも主張する所はしている。
そして可愛い。
「うんっ」

理穂は笑顔で頷いた。
……服よりもこっちの方が絶対可愛いよ。
「まぁ、とにかく入ってみようぜ？今日はお前の誕生日なんだし」
「……ん～っ、それでは行きます！」
理穂は決意したように言った。
「おっけ。じゃあ行くぜ？」
「はいっ」
俺たちは店の中にはいった。
その、店の中に。

5

店の中は思ったとおり、理穂の好きそうな服がたくさんあった。
「どうだ？」
「……感無量です」
理穂はまたもや目を輝かせて、店内を見回している。
そして、ふらふら～っと店の奥に行ってしまった。
「まったく……あいつは」
昔から変わらない。
すぐに遠慮する所も、好きなものに夢中になると周りも気にせずに突き進む所も、恥ずかしがりやな所も、笑顔が可愛い所も、純粋な所も。
ただ、それが誰でも理解できるとは限らない。
理穂はいつも目立たない所で過ごしてきたから。
だから俺は――
「あ～っ！」
店の奥から理穂の声がした。
「どうしたんだ？」
奥へと向かうと、
「ん…ちょっとね」
一着の服の前に佇む理穂がいた。
「お、それがほしいのか？」
理穂は小さく、しかしはっきりと首を縦に振った。
「やっぱり高いんだけどね……」
理穂は困ったように言った。
その服に目をやる。

そこには、真っ赤なワンピースがあった。
「おぉ……」
赤い布地に、大きなリボン。
「なんか……すごく、びびっときたの」
「俺も分かるよ」
何というか……シンプルなのに、すごく惹きつけられる。
存在感が大きいのに、かといって嫌味ではない。
「その服いいな。真っ赤で、とっても理穂に似合ってるぜ」
「ありがとっ」
理穂ははにかんで言った。
「でも意外だな。お前が赤い服を欲しがるとは」
するとほっぺたを膨らませて言った。
「意外って失礼ですっ。……たしかに、あんまり赤い服は着ないけど……でも、赤は好きだよ」
「確かに。そのリボンとかかなり似合ってるよ。前から思ってたけど」
理穂は真っ赤なリボンを髪につけている。
「ほんと〜？」
「本当だぜ」
真っ黒で長い理穂の髪から時折見える赤。
肌が白いこともあって、理穂と赤はとても相性がいい。
「そっか……」
「おう！」
理穂は再び赤いワンピースを見つめる。
「私も……この赤のようになれたらいいのに」
理穂のリボンが揺れた。
また……だ。
「それ、買ってやるよ」
自然と言葉が出ていた。
「えっ！？」

理穂は驚いたように振り返った。
「だって、今日はお前の誕生日なんだから」
「とっても高いよ？」
「大丈夫だ。それに遠慮したらだめって言ったろ？」
「そうだけど……本当にいいの？」
「いいに決まってるだろ。今日のために稼いできたんだから」
本当の事だった。
断られたら、何のためにバイトをしたのかわからなくなる。
「優人……」
理穂は、顔を赤らめて言った。
「それじゃあ、お願いしますっ」
「おう！任せとけっ」
俺は胸を張って言った。
さっきの理穂はすでに消えていた。
今は笑顔の理穂がいるだけだった。
「それじゃあ、試着とかしとくか？」
「うん！たぶんサイズはこれで大丈夫だと思うから……」
「それじゃあ行ってこい」
「うんっ！」
理穂は大切そうにワンピース―を抱きしめて、試着室へと走っていった。
その後ろ姿を見つめる。
「……これで、いいんだ。理穂」

6

数分が経った。
「ゆ〜う〜とっ」
理穂が試着室から出てきた。
目に映る俺の好きな女の子。
……こ、これは……！？
「理穂、お前……」
つい、呆然としてしまった。
「どう〜？」
理穂は赤いワンピースを翻しながら俺の所まで来た。
黒い髪。白い肌。赤い唇とワンピース。流れるようなリボン。
「お前……似合いすぎ」
「えへへ〜」
理穂は恥ずかしそうに笑った。
やべぇ。
この赤いワンピース、本気でやばい。
理穂が理穂でないように見えるくらい。
……理穂、可愛すぎるぜ。
俺はばくばくする心臓を押さえつけながら、
「そんじゃ、買いに行こうぜ」
「うんっ！本当にありがと！」
満面の笑顔。
またもや照れ隠し発動の俺。
「ほらっ」

理穂の腕を掴み、レジに向かう。
「もー、優人～っ」
あーだこーだ言いながらも、無事に服を買うことができた。
結局、理穂は買った赤いワンピースを着たままで店を出た。
とってもうれしそう。
スキップまでしている。
俺だけが知っている、理穂の姿。
「とっても可愛いぞ」
「もう。嘘ばっかり」
そう言いながらも笑っている。
俺の彼女です、と言いたくなる。
「優人」
理穂は俺の服の裾をつまんで言った。
「何だ？」
「このワンピース、大切にするね」
「おう」
「優人が私のために買ってくれたんだもの」
「おう」
「優人は……いつでも私の味方でいてくれる？」
「あったり前だろ」
「約束……ね？」
「あぁ、約束、だ」
理穂はまた笑った。
本当に幸せで幸せで。
真っ赤な彼女の隣に居れることが幸せで。

次の瞬間に、全てが壊れるなんて、全然思ってもいなかった。

7

「でね～、その後」
「おう」
あの後、俺たちは再び商店街を歩いていた。
また、とりとめのない話をしながら。
お互いに、笑いあいながら。
「ん？」
突然顔に冷たいものが当たった。
空を見上げる。
さっきまで晴れ渡っていた空とは打って変わって、真っ黒な雲で埋め尽くされていた。
アーケードの境目から雨が入ってきたようだ。
「理穂、急ぐぞ」
「どうしたの？」
「いや、雨が降り始めたからさ」
理穂も顔を上げた。
「本当だぁ。急がないと帰りしに大変な目にあっちゃうね」
「じゃ、いくぞ」
そう言ってからふと向こうの方に目をやると、たくさんの人影が見えた。
「あれ？今度はどうしたの？」
「いや……ちょっと気になって」
「何が？……あ」
だんだんと近づいてくる人影は……１０人ほどの女子高生の集団

だった。
しかも同じ学校の生徒みたいだ。
「同じクラスの人……かなぁ」
理穂は俺の背中に隠れるように身を寄せた。
「さぁ……こっからじゃ何とも言えないな」
理穂はさっきと打って変わってびくびくしている。
本当に人見知りだからなぁ……。
「別に気にしなくていいんじゃね？」
ぽんぽん、と理穂の頭をなでた。
「そだね」
理穂は苦笑いをしながら言った。
「今度こそ行くぞー」
「了解です！」
俺たちは歩き始めた。
そのとき、
「あれ？高山君じゃない」
俺たちの目の前にまで迫っていた集団の中の一人が俺に話しかけた。
それも、集団のリーダーらしき人物がだ。
「偶然ね。放課後に会うなんて」
そいつを見る。
……こいつ。
「もしかして、隣に居るの川崎さん？制服着てなかったからわかんなかったよ」
こいつにはここでは会いたくなかった。
「えー、もしかして一緒にお買い物とか？川崎さんもやるじゃない」
「あ……いえそんな……」
理穂は小さな声で言った。
さっきまでピンク色だった理穂の顔が、少し青くなったような気がした。

「お前……こんな所で会うなんて奇遇だな」
「そうね。とっても嬉しいわよ、あたし」
俺は嬉しくねぇ。
今までのあったかい気持ちが冷めていくのを感じた。
こいつ……峰山響子はうちのクラスのボス的存在だ。
理穂は、こいつと相性が悪いらしい。
無理もない。
理穂は引っ込み思案で、響子は派手だから。
あっちもそう思っているはずだ。
俺も、こいつはあまり好きじゃない。
それに……。
そんな俺と理穂の様子を気にせず響子は言った。
それも理穂に。
悪意のこもった声で。
「あなた、クラスでは影薄いのにそんなに派手な服きてるんだぁ」
……いちいちこいつの言うことは癇に障る。
理穂は額に汗を浮かべながら、必死に何かを言おうとした。
「これは……今日だけです。いつもはもっと」
「じゃあその服、高山君に買ってもらったんだ」
響子は攻め立てるように理穂に言った。
「はい……そうだけど」
「ふぅん」
「それがどうかしたか？」
響子は恨めしげに理穂に目をやった。
「……あたしのことを振っておいて、こんな子には買ってあげるんだ」
「お前なっ」
俺は響子に掴みかかろうとした。
ふと横を見ると、理穂がおびえた表情をしていた。」
……だめだ。

湧き上がる衝動を何とか抑えた。
「あれ？怒っちゃった？まー、今更あなたには興味ないけどね」
響子は悪びれも無くずけずけとそんなことを言う。
……そう、俺はこいつを振った。
当然だ。俺は理穂一筋なんだから。
それに、多分こいつも本気ではなかったと思う。
俺なんかのどこがいいのかも分からないし。
「……行こう、理穂」
いつまでもこいつらと関わっていたら埒が明かない。
「あ、うん……」
理穂の腕を掴んでその場を去ろうとした。
そのとき、
「川崎さん、ちょっと話があるんだけど」
響子がそう言った。
「……何だよ」
思いっきり響子をにらみつける。
「あなたじゃないわ。……ちょっと来て」
「……はい」
恐る恐る理穂は響子に近づいた。
理穂の耳元で響子が何かをささやく。
次の瞬間、理穂は大きく目を開いた。
「え……？」
「それじゃあ」
理穂は呆然と立ったままだ。
響子はずんずんと俺の方に近づいてくる。
そして俺とすれ違う瞬間、
「あの子、これからどう遊んであげようかなぁ」
確かに、そう言った。
その言葉の意味することはただ一つ。
……制御不可能。

「てめぇっ！」
手を上げようとした。
「やめてっ」
その刹那、理穂が俺の腕を掴んだ。
「ね、お願いだから」
悲しそうな理穂の顔。
「……ごめん」
すうっと熱が引いていくのが分かる。
「ばいばい、高山君」
響子はにやりと笑って、仲間の元へ帰っていった。
「……くそっ」
いつの間にか雨は本降りになっていた。
長い間そこに立っていた気がする。
それとなく、理穂が言った。
「……それじゃ、帰ろっか」
「……そうだな」
「雨ひどくなっちゃったから、コンビニで傘買お？」
「……そうしよう」
理穂の顔を見る。
「理穂」
「何？」
「お前は……俺が守るから」
「うん……ありがと」
そこにはまた、寂しそうな理穂がいた。
その後、傘を買って、理穂を家まで送った。
別れ際、
「ごめんな？誕生日なのに、こんな……」
「謝らないで。それに……私にはこのワンピースは十分すぎただけだから」
理穂は微笑んで言った。

「そっか……それじゃあ、また明日な」
「うん。また明日」
今日は理穂の誕生日。
平和な日常が終わりを迎えた日だった。

8

何回も鳴り響く目覚まし時計の無機質な音。
「うぅ……」
布団の中からのそのそと顔を出す。
目覚めは最悪だ。
いつもよりも早く起きたこともあるのだろうけど。
乱暴に目覚ましを止め、枕に顔を埋める。
昨日のことが頭の中をぐるぐると回る。
よりにもよって……理穂の誕生日だったのに。
くそ……あいつら、どういうつもりだよ。
思い出されるあの瞬間。
理穂の悲しそうな顔。
「気にしすぎ……なのか？」
しかし……悪い方向にしか考えられない。
「あぁ……駄目だ駄目だ」
むくりと起き上がって、顔を手のひらで叩く。
そうだ。こんな事ばっかり考えてないで、理穂を迎えに行こう。
こんなときぐらいは一緒に。
一緒に学校にいくだけでも違うだろうし。
「よし」
理穂は、俺が守るから。
そう、決めたんだから。
顔を洗い、着替え、軽く朝食をとった。
鞄を持って家を出る。
向かうは理穂の家。

あいつの家は比較的俺の家から近い。
早歩きで道を進む。
空は昨日の雨がなかったかのような青さだ。
すぐに理穂の家の玄関前にたどり着いた。
「久しぶりだな……」
そういえば最近ここにあまり来たことがなかったな。
登校時間も違ってたし。
まあいい。
もうそろそろ理穂も家を出るはずだ。
壁にもたれかかって数分。
玄関のドアが開き、その向こうから理穂が顔をひょこっと出した。
「あれ…？」
かなり驚いているようだ。
いきなりだから仕方が無いか。
「おはよ、理穂」
笑顔で言った。
「どうしてここにいるの？それにいつももっと遅いんじゃ……」
困惑した表情で尋ねる理穂。
「ん～、なんか急に一緒に行きたくなったからね。そのためなら早起きだってできるさ」
俺はそう言った。
本当のことだし。
「そっか」
理穂は少し顔を赤くして、一言だけ言った。
やっぱり可愛いな。
「理穂は俺なんかと一緒に投稿するのは嫌か？」
「全然！」
即答。
直後に理穂の顔がまた赤くなる。
嬉しい。

「じゃ、行こうぜ」
「うんっ」
理穂は笑って大きく頷いた。
確かに、笑顔だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2780e/

赤いワンピース

2011年1月3日17時55分発行